

3. 里川探し—香流川を歩く—

第一回 日時 2004年 8月25日 8:30～17:30

同行者 本守真人氏（前・愛知県建設技監）

第二回 日時 2004年 9月16日 11:00～17:00 単独

第三回 日時 2004年 10月13日 14:00～17:30 単独

第四回 日時 2004年 11月25日 11:00～17:00 単独

1) 香流川概要

地形的には、2005年「愛知万国博」のメイン会場となる長久手丘陵「三ヶ峰」に源を発し、長久手町、尾張旭市、守山区、名東区を経て、千種区の猪子石で庄内川水系の矢田川に合流する。

この辺りは、ゆるやかな丘陵地帯であり、その浅い谷を流れる全長14、5キロメートルの小河川である。

名前の由来は、大正11年発行の地元猪子石青年会の機関誌「嘉那礼八号」によれば往時の香流川は、「清く麗しき香流」と言われるような河川であった。

但し、一説には「涸流川」との由来もあり、その昔は、治水事業も十分でなく天井川であったから、大雨が降ると一気に増水し、雨が降らないと干上がってしまう川であった。

昭和37年より土地区画整理が本格化し、この一帯は名古屋のベッドタウンとして急速に開発が進んだ。その結果、現在は住宅が密集し人口も10倍以上に拡大、典型的な都市河川となった。

ここに住む人たちも地元定住者は1割で、9割は土地区画整理後に住み着いた人たちであった。ところが、最近10年はマンションの新築も増えて、いわゆる転勤族も急増している。昨年の県河川課の調査によれば、名古屋市の区の中で名東区の住人のほぼ2割はその転勤族に相当する。（04年県建設局河川課調査）

「河川改修の履歴」 昭和12～13年頃に川幅を広げる工事、蛇行改修工事
昭和30年～区画整理に伴う本格的治水事業
平成3～5年多自然型の改修工事
平成13年東海豪雨後の激甚災害工事

2) 香流川観察記

①ふれあい橋（矢田川合流点）～香流橋（0、8キロ）

河口口は、住宅地であるが比較的川幅が狭く、従って、川底を深くして低水護岸（散策道）を設け親水性を持たせた。（この散策道が改修まえの川底）

「本来は、もう少し幅広いことが望ましいのだが住宅開発が進み、川底を深くし

た。」(本守氏談) — 「写真-1」

さらに、この間に流速対策もあって、「落差工」、「瀬」、「飛び石」を設けて親水性も高めた。また、魚巢ブロックを堤の3分の1位の高さまで施工し、増水時の魚の隠れ家とした。

i) 常魚にとって最適な水深は、体高の3倍以上

ii) 魚の習性として、増水時に急流を避けて堤防側の寄る。

iii) 川幅に開閉を設け、「瀬」と「淵」をつくり、自然に土が溜まり草が生えることを意識する。「淵」と「草むら」で魚は休息する。一鯉が跳ねる。

iv) 植栽ブロックも設けて、自然に草木が伸びるようにしている。

このわずかな区間にも、多自然型と親水性の工夫がされている。とは言え、あたりを散策する人は全く見られなかった。(午前9時ごろ) — 「写真-2」

②香流橋付近

最初は土橋として天明6年(1786年)に架けられた。(「猪高村誌」)

香流川の中の架け渡しの橋としては、もっとも古く敷設された。昭和の初めまでは、猪高地区(約2.5キロ)の架け渡しの橋は2つと板橋が1つしかなく、川を挟んで「川北」、「川南」に分割され、南北の交流は少なかった。

戦後になって、3つの架け橋と4つの人道橋が作られ「川北」「川南」の交流が計られるようになった。

このあたりは、200mおきに低水護岸(散歩道)へ降りられるように、階段がつくられている。

この橋の袂に新しい小さな社に「石造り馬頭観音」(安永9年/1780年)が安置されているが、明治24年以降40年間に7回の洪水に見舞われたという。(昭和7年組合パンフ)大洪水のたびに馬頭観音は流され、その都度見つけ出して安置されてきた。ところが、昭和20年の大空襲で香流橋付近の水田に爆弾が落ち、同時に観音さまもどこかへ吹き飛んでしまった。以来、探せど探せど見つからず、身代わりの観音さまを安置したのである。(昭和22年 身代わり地蔵設置)

昭和44年土地区画整理が本格化し、パイプ敷設工事で矢板打ち込みの最中に、三度び馬頭観音が発見され、本尊と身代わりの2体を安置する。 — 「写真-3」

サイクリングロードの出発点〜新富士浦橋まで 7.5キロ — 「写真-4」

その付近に「サイクルペース・あさひ」(自転車屋/レンタル)

③香流橋〜新屋敷橋(約0.7キロ)

このあたりも、瀬と淵を繰り返しており、所々に土砂溜まりがあって自然の草が繁っている。堤はコンクリート張りとならば草に繁った自然の作りが交互に見られるが、本守氏の話では、自然に見える堤は「蛇籠」を使っているという。そこに土砂が堆積し、やがて種が住みついて草が繁った。一見自然な堤でこれも多自然型川づくりである。同じような堤に見えても治水の視点を中心において、さまざまな多自

然型の工夫が施されている。

この間の中間にある久留里人道橋付近に「多自然型川づくり」の看板（名古屋市河川課）が建っていた。－「写真－6」

i) 「蛇籠」：流速の緩やかな部分に適用して、自然な堤を設計する。かつて、蛇籠も鉄線が錆びてきて10年位の寿命で十分でなかったが、錆びない鉄線ができて30年の寿命となり、自然の堤として活用できるようになった。

ii) 「新屋敷橋」：昭和42年に土地区画整理が本格化してから完成。それまでは「川北」「川南」の交流はほとんどなく、板を渡しただけの橋で洪水の度に流された。整理組合の助成金で建設された。

④新屋敷橋～中島橋（0、5キロ） －「写真－7」

新屋敷橋から上流の延珠橋までの約2キロにわたり500本の桜並木が続く。

この桜の植樹は、区画整理が完了する昭和45年の行われ、30年を経ている。

このあたりは、兩岸にサイクリングロード及び散策道が整備されて、春は桜、夏は緑陰、秋は紅葉、枯葉の風情があって、散歩コースに利用されている。

後日夕方に訪れた時には、主婦のグループ、シルバーの人たちが散歩する姿が見えた。4月には必ず「香流川桜祭り」が開催されている。－「写真－8」

i) 「香流川桜堤」日本の堤には桜という固定観念は、盛り堤には問題である。治水の視点からみて、堤防の強度を弱体化させる恐れがある。また、その固定観念は、多自然型の発想からすれば陳腐化した景観論でさまざまな種類の植樹をすべきである。（本守氏意見）

ii) 「中島橋」 この付近はかつては「中島」という字名があった。旧猪子石村のルーツといわれる地区で、由緒ある月心寺とか猪高小学校の分校開設（大正9年⇒昭和29年香流小学校）とか、早くから部落が集約していた。香流小学校改築の時にただの板橋が、鉄筋まがいの橋に建造された。（香流川最初に鉄筋橋）

iii) 「月心寺」 対談者：23代住職 岩田三蔵氏 －「写真－9」

開基は寛文2年（1662年）曹洞宗のお寺で、猪子石地頭小笠原惣左エ門（知行800石）の戒名「月心宗江大居士」に由来する。

現住職は月心寺となって800余年、23代目となる。

猪子石城の跡地の建立、明治6年同敷地に「香流小学校」を創立明治19年現香流小学校の地（中島）に移転。

昭和の河川大改修（12、3年）まで、香流川は月心寺の真下まで蛇行していた。猪子石城が在ったことから要害の地であった。

iv) 「高木酒店」 対談者：4代目店主 高木氏 －「写真－10」

かつては「高馬の酒」として、近隣の村々にその名を轟かせた

造り酒屋であった。高馬は創業者「高木馬太郎」の名をとって呼

ばれました。近所の米屋が持っていた水車小屋で精米した米と香流川のみずを使って醸造した。(米屋は、高安商店として現存) 銘柄は「茂生(しげき)桜」・「香泉(こうせん)」。戦時中の物資統制などが原因で醸造を中止した。(明治末～昭和13年)

高木酒店の広い裏庭には、今でも煉瓦造りの煙突や釜の跡が残っている。(同じ煙突が、小布施造り酒屋に現存)

4代目店主が2003年「吟醸酒香流川」を商品開発し販売中

v)「猪子石神明社資料館」 対談者：神明社宮司 山田龍太氏

昭和62年(1987年)当地域の区画整理が完成に伴い、当地域において、古くから伝わる「おまん和秋祭り」の使われた「馬具飾り」、「棒の手」、「火縄銃」等を收拾し、保存する為に建設された。場所は、「月心寺」の隣接している。

⑤中島橋～延珠端(約0.9キロ)

この間には500本の桜並木が連なり、香流川の中で景観的にはもっとも美しい場所であるが、平成元年環状2号線が完成しこの付近の香流川をまたぐ高架橋ができた。その結果残念であるが付近は、非景観な状況になってしまった。

気の所為か付近の川辺、川中にゴミが多く見られたのは、巨大な人工物が人々の公共心を汚染しているのかも知れない。 —「写真-11」

ちょうど高架橋横に人道橋「引山橋」が作られ、その際に「香流川緑道」の石碑と両岸にベンチが設けられていた。 —「写真-12」

新しい試みとして、川に沿ってある「引山小学校」では、香流川に対する関心が高く、自然教育の一環として昭和58年校内に地下水を引いて観察池をつくった。これは現在多く見られるビオトープの先駆であった。

i)「引山小学校」 総合教育の一環として、このビオトープに香流川から水を引き、香流川と同じ生態系をつくることを検討している。

⇒近隣小中学校の関わり方

ii)「人道橋」 この付近まではもっとも人口過密な地域となっており、且つ、川北住民と川南住民の交流がはかりやすい環境作りとして、昭和47年から人交流できる橋の建設が進められた。

矢田川の分岐点からここまで2.9キロの間に車道橋は4本、人道橋が5本と計9本の橋が架かっている。およそ300mに一本の橋が架かっていることになる。 —「写真-13」

⇒香流川北・南側住民の交流の変遷

iii)「桜祭り」 香流小学区自治会の主催

中島橋手前の人道橋「神ノ木橋」から上流へ約2キロ、500本の桜並木が続く。

⇒催し物、イベントの関わり方

⑥延珠橋～振興橋（1、2キロ）

ここもちょうどこの間の真中に「名神道路」の架橋が架かっており、桜並木も終わり兩岸にはマンションが多くなって来る。このあたりも低水護岸とサイクリングロード及び散策路が続いている。植栽ブロックとか落差工、親水性の工夫もしてあるが、コンクリート張りの部分も多く、何故か無味乾燥した風景である。真中に支流（藤ノ木川）が流れ込んでいるが、典型的なコンクリート3面張りの都市河川であり、一層自然性が喪失している。－「写真－14」

兩岸500mの中に小、中学校が4校あるが、高層マンションも多く人口密度が高いことの裏づけでもある。

4校の校歌を調べてみると2校には、歌詞の中に「香流川」とか「香流の流れ」という言葉が入っていた。

※香流川周辺の小中学校・校歌一覧表（香流川より500m以内）

行政区	校名	川名の挿入	主な歌詞
名東区	引山小	×	
〃	香流小	×	一番古い歴史ある小学校
〃	猪子石小	×	
〃	豊が丘小	○	窓にきらめく香流川
〃	香流中	○	清気みなぎる香流川
守山区	森高東小	○	森高 香流 一つになって 緑陰うつして 流れる岸边
〃	森高中	×	
千種区	宮根小	×	
長久手	長久手北小	×	
〃	長久手東小	○	歴史湛える香流川
〃	長久手小	○	香流川を貫いて
〃	長久手中	○	香流の川の水清し

- i) 流域圏の小中学校は12校。内「香流」又は、「香流川」の歌詞が吐いていたのは6校であった。小学校は9校中4校、中学校は3校中2校であった。
- ii) 距離の遠近による差はなく、香流川に隣接する学校（100m以内）は、4校あるが歌詞があったのは1校である。
- iii) 長久手町内の小中学校でみれば、4校中3校に歌詞が入っている。
地域的に見ると長久手町は、かつて家康×秀吉の「長久手の戦い」のあった歴史ある町で現流域で、10年前まではまだまだ自然豊かな地域であり、香流川の自然が見られたのかもしれない。（万博誘致後 開発は急テンポ）
- iv) このことから類推すれば、歌詞の制作年がその地域の風景、人の関わり程度が

反映されるのではないか。

- v) 山梨大/北村慎一教授の「川と校歌」という文献に寄れば、「学校が立地する地域の風景、文化、山川などの環境意識が詠み込まれており、地域がどのように詠み込まれているのかを読み取るテキストとして良い材料となる。」とある。また、「遠近による差はあまりなく、流域で見ると上流部53%、中流部47%下流部38%と差が見られる。」 ⇒校歌の関わり方・活用？

- vi) 河川草刈り作業

—「写真-15」

この区間で特に、新藤森橋～振興橋間(500m)は桜並木もなくなり両岸はマンションと公団の高層建築が多く、川べりを歩くと空き缶とかゴミが散乱していた。ちょうど業者が草刈り作業をやっていたが、年に一回お盆前後に県河川課の委託で行っている。ここに住む住民は、建物から推察するにほとんどが新規居住者か、転勤居住者であり、したがって、地域のことについて無関心な住民が多いと思われる。⇒住民の関わり方

⑦振興橋～石田橋(2、5キロ)

10年前に多自然型川づくり工法を若干、取り入れて改修工事を行った折に、振興橋の際にあるスーパー「清水屋」が五百万円を寄付。清水屋店舗からつながるような設計で親水性空間を造った。45㎡ほどのコンクリートの踊り場があって、当初スーパーのイベントなどに使っていたが、最近使われていない。(スーパーの業績?) ⇒企業の関わり方

ちょうど中間あたりに川べりに沿って運動場が広がる小学校があり、小学校からの出口も作られ川には、円形多段落差工(魚窪地併設)が設けられていた。また、学校側の川べりには、低水護岸が親水性をもたせて設けられていた。さらに、その上流には学校側に沿って支流(雁又川)が流れ込んでいて、合流地点はわずかに洲ができていて葦などの草が繁って自然な風景があった。

対岸には、「原邸公園」という小奇麗な公園があって、その公園と小学校、親水性護岸、草の繁った洲がトータルに再設計すれば、小学校の学習にも近隣住民の憩いのスペースとしても活用できそうな場所であった。 —「写真-16」

そのあたりには、鴨の姿も多く見られ護岸に降りてみると、魚影も見られるほどに比較的澄んだ流れであった。しかし、川面に川を近づけるとカルキのにおいはっきりと感じ取られた。

このあたりは、長久手町区域であり田んぼもあって土地開発もこれからである。この区間の終点となる石田橋周辺には、「長久手町文化の家」、「中央図書館」など長久手町の文化的な施設が集中しており、本格的な土地開発が実施される前にそのような憩いの水辺空間づくりが必要である。

- i) 自然が多く見られ、かつてホテルがいたとの情報もあって、ホテルブロックが施工されていたが、水面よりかなり高い位置に施工されていて全くの失敗

作。(本守氏談)

「香流川のホタルを守る会」結成(1989年~1991年)

1980年前後までは、ヒメボタルがわずかに確認された。土地開発が進み人口増加に伴い、治水優先の護岸工事が計画され、これに対抗して会が結成された。結果としては、アンケート調査等で新住民の治水優先の声が採用されて、治水優先の護岸工事が進み、この会も断ち切れとなった。

ii) 多自然型川づくりの実験(1989年) —本守氏談

石田橋の付近には、結構多くの草花が繁茂しており、本来の流れを変えて蛇行する流れをつくった。州が中ノ島のように土砂が堆積し全く自然が運んでくる草花が繁殖して行った。市民が植えたものもあるが、ゆうに30種位は繁茂していた。 —「写真-17」

この場所の管理を何処に任せるか、これが結構難しいそっくり市民に任せてしまうと、自分達の好きな草花にしてしまう。できる限り自然に任せて、雑草も含めてそこから市民の皆さんが学んでほしい。

多自然型川づくりはメンテフリーが基本。(特に近自然工法は)

⇒香流川の自然との関わり方

iii) 長久手浄化センター

香流川流域の人口急増に伴い名古屋市東部、長久手町地区の水質保全と居住環境の改善を目的とする下水道事業の中核部として、1992年建設に着手し1996年に完成した。

日最大処理能力 / 12,000立方メートル

⑧石田橋~岩作橋(1.5キロ)⇒累計 8.1キロ7 —「写真-18」

香流川のちょうど中間地点にあたる区間である。周囲の環境は次第に田んぼとか林が見られるようになる。香流川を挟んで長久手小学校と中学校が200m以内に隣接していて、両校はこの地域では一番歴史のある学校である。したがって、前項で調査した校歌の中に両校とも「香流川」、「香流の川」の歌詞が詠み込まれている。

さらに、この地域は町役場、消防署、商工会など行政の中心部でもあり、かつて天正2年(1584年)豊臣秀吉×徳川家康が戦った「長久手の合戦」の戦場があり、文化的な史跡の多い町である。

このあたりは明治39年岩作村、長湫(ながくて)村が合併して、長久手村となった。この岩作村には、非常に古いけんちくぶつがあり、幕末から明治にかけて岩作村庄屋であった浅川幸右衛門の広大な屋敷(1852年建築)が現存する。浅川家は、かつて紺屋と質商を営んでおり紺屋は香流川の水にかかわりがあるかもしれない。

この付近まで来ると、かなり川面に魚影を見る事ができ、堤も草が繁って自然な

景観が見られた。(本守氏の話では、近自然工法を手がけた場所)

石田橋の上流一つ先に「青山橋」があり、その先に支流が流れ込んでいて「香桶川」という。この川の合流点は、完全な三面張り都市河川であった。

ここ2～3年は「愛知万博」に向けて、自然保全の課題が議論されることも多く香流川の扱いもその一つである。

i) 長久手町商工会の活動(事務局 浅井氏)

愛知万博に連動して、2003年から愛知県環境部が「あいちクリーンキャンペーン」を提唱し、愛知県の各市町村において独自の取り組みが展開されている。

長久手町商工会青年部が中心となって、「香流川クリーンコミュニティ～私たちの誇り、香流川をきれいにしよう！！～」の活動が始められている。

昨年4月から今年9月までに6回香流川の清掃活動を実施している。その区間は石田橋～前熊橋の500mであり、6回の述べ参加人数は645名でした。事務局としては、万博後も継続したい意向であった。

長久手町は、香流川の源流域もかかえているが、香流川にかかわる活動団体は見当たらないとのことでした。

ii) 岩作橋付近

名古屋市水辺研究会の調査によれば、一番多く採取したのはオイカワとヨシノボリである。アレンジがかったトウヨシノボリ、モツゴとカマカツを採集、カワムツは見つける事できなかった。また、季節によってはアオサギ、オオサギ、オシドリも見かけることもあるという。

ここまで来ると、川の異臭、カルキ臭もなくきれいな流れになってきているがきれいな水質判定の指標となるカワムツ、カゲロウ、トビケラ類は見つけれなかった。

⑨ 岩作橋～三つ峯源流部(7キロ)

—「写真-19」

岩作橋が香流川の中点であり、上流と下流の端境点となる。この下流は、コンクリート張りの堤防が続くが上流域は、コンクリート張りはなくなり比較的自然的な河相に変化を見せる。竹やぶがあつたり、水田があつたりと緑の風景が多くなってくるが、この辺りまで土地は開発は進んで住宅も増えていた。

しかし、反面農業用水の引き込みとか砂防対策の堰堤が造られて、水生動物(特に、魚類にとって)が住みにくい環境になっていた。

それでも堰堤の手前の深みには魚の姿も見られ、川原に鴨、アオサギの姿も見られた。また、この辺りにも小高い丘があり右岸には「色金山」が、左岸には御岳山があつてその間を香流川が流れ、その空間だけを見れば、のどかな田園の風景である。さらに上流に向うとやがて左側に青少年公園(200ha)とそれに続く万博会場(760ha)の丘陵地帯が広がり、前方には名古屋市内から豊田市に通じ

る高架幹線道と万博用に建設中のモノレール高架が川を跨いでいる。緑の丘陵部分が削られて茶色い土肌がまだらに展開していた。香流川は幾つかの小さな堰堤を越えながら一気の水量が減っていくのがわかった。このなだらかな丘陵地帯には、かつて多くの湧き水があったが昭和 30 年台に開発が進み、森林が伐採されて急速に水量がなくなった。万博に開発事業は恐らく自然破壊を一層進行させる事になったのではないか。いよいよ源流域に近づくと香流川砂防公園が整備され湿地帯風に水辺と草むらの風景が広がっていた。そこからは、せせらぎのような僅かな水量を辿って、1 キロほど上ると高さ 2 m ほどの堰があって、ほんの少し水に濡れている程度に水の痕跡があるが、ここが「香流川」の源流と聞かされ驚きでした。「写真 2 2」地理的には、三ヶ峯という地点で三河の豊田市と長久手、日進市とを分ける峠であり、峯であり、分水嶺である。水源地点は、その峠より手前 5 0 0 m にあって標高約 1 5 0 m にあたる。このコンクリート張りの水源を見て唖然としました。かつては、分水嶺地域であり湧き水豊富な湿地帯がこれほどまでに改ざんされる無差別開発の負の遺産を見せ付けられた思いでした。

i) 色金山歴史公園 (いろがねやま)

— 「写真— 2 0」

1584 年豊臣秀吉と徳川家康の軍勢 3 万 5 千人以上が直接対決した「小牧・長久手の戦い」の決戦場となったのが長久手の地であった。

特に江戸時代には、先君の偉大な戦いの地として、多くの武将がこの長久手の地を訪れ、戦いの様子は「小牧長久手合戦屏風絵図」として残された。

当時頻繁に軍儀を開いた場所が「色金山」であり、昭和 14 年国の史跡に指定された。平成 3 年、「長久手町制 20 周年」を迎える事業に一貫として「古戦場の町」をアピールする為に整備された。このときモデルとなったが、ベルギー・ワテールロー市であり、姉妹都市となっている。

家康が軍儀の度に腰を掛けたといわれる「床机石」(陣屋、狩場で使った腰掛)がある。 ⇒ **香流川と地域の歴史と文化の関わり**

ii) 香流川砂防公園

— 「写真— 2 1」

もともと香流川の上流部は、土砂の流出が盛んで明治 33 年砂防指定地に指定され、古くから砂防工事が行われてきました。特に、昭和 40 年以降は土地開発事業が進み、大雨による河床上昇のなど洪水の危険にさらされています。

そのため、ここに川幅を広げ、砂溜工をつくり大雨時の土砂留めを造った。草木も植樹されて、湿地帯風に出来ており生態調査によれば、メダカ、モツゴヨシノボリ、ドジョウ、スジエビなどがいる。

普段は公園として、憩いの場としての利用を考えた。

工 期	1989 年～1996 年
面 積	約 1 2,0 0 0 m ²

土砂留め量 約10,000m² (ダンプカー 2,000台分)

地元の話では、10数年前までは自然に湿地帯でハッチョウトンボが飛びシラタマホシクサが咲いていたと言う。また、周辺の丘陵地帯には桃畑もあり小学校の課外事業で桃狩りをしたとのこと。 —「写真 - 23」

3) 香流川における「里川」シーズ

自分流の「里川の要件」に照らし合わせて見れば、以上の香流川探訪の中にいくつかの要件となりうる種(シーズ)がありました。探訪の順に列記すれば

- | | | | | | | |
|------------------|-------|-------|---|-------|---|---|
| ① 隣小・中学校の関わり方 | ————— | 自分流要件 | ① | ②⇒④+③ | ⑤ | |
| ② 流川北・南側住民の交流の変遷 | ————— | 〃 | ④ | | | |
| ③ 催し物、イベントの関わり方 | ————— | 〃 | ① | ④ | | |
| ④ 校歌の関わり方・活用の仕方 | ————— | 〃 | ① | ② | ③ | ⑤ |
| ⑤ 住民の関わり方 | ————— | 〃 | ① | ② | ④ | ⑤ |
| ⑥ 周辺企業の関わり方 | ————— | 〃 | ① | ② | ④ | ⑤ |
| ⑦ 自然の様相 | ————— | 〃 | ① | ② | ③ | |
| ⑧ 地域(流域)の歴史との関わり | ————— | 〃 | ③ | ④ | | |

これらのシーズを将来に向けてどのように育成していくのがいいのか、過去の事例、現在の事例を踏まえて仮説を立てて見ました。

①近隣小・中学校の関わり方————自分流要件 ① ②⇒④ ③が加味される ⑤
香流川から500m以内の小中学校12校がこの2~3年、香流川についてどんな学習活動をしてきたか。

- ・現時点では、小学校2校、中学校1校が香流川で自然観察会を実施している事を把握。(各年一回)
- ・総合学習が導入された以降の変化は
- ・万博がらみでもいいから清掃活動は

※④校歌の関わり方・活用の仕方も関連するが、各学校を訪問した折に校歌への関心が低いように感じられた。

「仮説」：香流川歴史・自然、体験学習を4年~6年総合学習に導入

②香流川北・南側住民の交流の変遷————自分流要件 ④

町史や古老の話から、橋が少なく南北の交流は活発では無かった。しかし、区画整理が昭和40年から本格化してからは、人道橋が多く掛けられ南北の往来はしやすくなった。町史によれば、

- ・「おまん和祭り」平成3年まで行われていたが、継承者不在にて以後中止。祭り用道具の展示⇒「猪子石神明社資料館」(起源：室町末期)
- ・昭和50年初めまで、お盆「精霊流し」があった。
- ・戦前までは、非常に多くのホテルが見られた。

かつては、南北が川を挟んで遠いところにあったのではないか。ほとんどの住民が昭和40年以降の居住者であり、温故知新の考えをもって、

⑤住民の関わり方として、再構築すればよいのではないか。

その上で、③催し物・イベント、⑥企業の関わりを加味していけば、住民参加の広がりが可能となる。

③催し物、イベントの関わり方——自分流要件 ① ② ④ ⑤

恒例化した催し物としては、4月の「桜祭り」しか確認していないが、この企画は学区の自治会は主催している。

名古屋市の都市計画課が、香流川ウォーキングを企画しているが、これは、万博関連の行事である。地域の自主企画であれば良いのですが。

⑥の「周辺企業との関わり」のも連動するが、この種の活動は全くといってよいほど、活動されていない。

④校歌の関わり方・活用の仕方——自分流要件 ① ② ③ ⑤

校歌の関わり方は、2) -⑥で見たとおり「香流川」の存在感を計る目安でもあるが、存在感はそれなりにあったと言える。

活用の仕方については、ある中学校で面談した先生が「最近、校歌を歌ったかな」と言う返事があった。校歌に対する認識が先生でも低く、校歌による活用はなかなか難しい印象である。

例えば、この地域のすべての校歌に「香流」、「香流川」の歌詞を強制的に入れるとか、毎朝斉唱するとかして、その上で、自然が豊かできれいな川であれば - - - -。

⑤住民の関わり方——自分流の要件 ① ② ④ ⑤

現状は、住民の関わり方が非常に低い河川である。一番良い形は、散歩したりジョギングしたり日常的に関わりあうことがベストです。

日常的に川と接することが、その川への関心を高め、「今日は水が汚れている」とか、「ゴミが多いとか」とか、「もっと緑を増やしたい」とかの声が聞こえる事が大切である。

通勤族が多い地区において、川との関わりは果たして生まれるのか？あるいは、どうしたら生まれるのかを試行錯誤してみるのも面白いかもしれない。

⑥周辺企業の関わり方——自分流の要件 ① ② ④ ⑤

現状では、前述した振興橋の袂にあるスーパー「清水屋」の店舗と本社があって、建設費の拠出して作った親水性空間が使われているか。を把握する事から始まります。

ほかに大きな企業は無く、川べりにレストランとか、喫茶室とか、ちょっと洒落た店が点在すれば人の往来が在り、店に入って川を眺めながら喫茶、食事に機会が生まれてくる。これも、現時点では1店舗のみであった。

⑦自然との関わり方———自分流の要件 ① ② ③

同行した本守氏が語ったように、彼の強い意志で全国的にもいち早く「多自然工法」に取り組んだ河川であった。愛知県土木事務所の記録によれば次のように記されてあった。

「河川改良にあたり、特にその地域は、周辺都市河川の中で数少ない蛍の生息地であることを考慮し、河川周辺の自然環境を守る必要がある。計画にあたり、蛍護岸、階段護岸の二箇所の親水施設を取り入れる。

これは、自然景観を重視したわが国でも2番目の試験工法であった。」

(施工期間 昭和61年～平成3年)

それから13年を経て、蛍保護の意図は2)－⑦項で記したように新しい住民の反対にあい、消えてしまい蛍ブロックのみが残る事となった。

それでも所々に瀬戸淵が、交互に配置されたり、2)－⑦の石田橋付近に本守氏実験的に施工した多自然型工法は、まだ生き残っていた。

そして、桜並木も有り秋の紅葉もまた風情がある「香流川」畔は、充分自然に恵まれた空間である。その割に、住民の関心が低いのは、比率として土着住民が減り、新入住民、転勤族住民が増えて、地域景観への関心が低下しているに過ぎないのである。

彼らも長い目で見れば地域住民となり、あるいは、一時的にしる地域の住民となる訳だから、良い自然環境を大いに良しとするであろう。

(参考)「香流川の水質経過 BOD 単位m/l」

	環境基準	環境目標値	1993年	→2003年
香流川	8以上	8以上	7、2	5、0
山崎川	〃	〃	6、5	4、4
天白川	〃	〃	7、4	6、8
堀川	10以上	10以上	9、3	6、4

⑧地域(流域)の歴史と文化とのかかわり方

最初に記したように、比較的短い河川であるが千種区、守山区、名東区、そして長久手町と名古屋市の新興住宅地域であり、新しい住民が多くを占めている。反面、名古屋の東部丘陵地帯である、比較的自然が残っている地域でもある。一方歴史的にみれば、特に優れた歴史的遺産とか文化遺産が残ってはいないが、長久手地域に「秀吉・家康唯一の合戦場」が残されている程度である。あとは、2)－④項の「猪子石 おまんと秋祭り」の復活の是非である。

もう一つ、大きな遺産として残せるか否かは、「環境・地球博」と言われる愛知万博の跡地利用である。そして、万博決定以来関心が高くなった事は、香流川の源流が万博隣接地のある事です。上流部の長久手町、中心部の名東

区において、香流川をきれいにする活動が手がけられるようになった。
歴史、文化、自然そして万博の相乗的活用が望まれる。

4. 香流川の里川化論

以上、自分流の里川仮説を踏まえて、名古屋を僕の地元フィールドと位置づけ、最大流域河川・庄内川水系にターゲットをもとめ、もっとも、住民のかかわりが少なく自分流の里川要件の希薄な「香流川」へと絞り込みました。

まずは、ターゲットを自分の目指す里川に仕立て上げるためには、相手を知る事であり、それは、文献や資料ではなく、自分の身体で体験する事だと覚悟を決めました。とにかく、4日間のべ24時間30分の香流川体験によって、昨年8月25日以前に、「香流川」を研究対象に決めたときには、思いもかけなかった出会いと発見が生まれました。そして、現時点では名古屋の中で僕にとって、一番好きな香流川を「里川」にする企画書を以下、作成してみました。

1) 里川シーズの活用

- ①恵まれた条件として、大都市河川でありながら決して大きな川ではなく、河口付近でも川幅30m程度の狭い川であり、比較的自然的に残された環境にある。
- ②歴史的には、一番歴史ある猪子石の秋祭りが資料館に保存されており、秀吉・家康の歴史的合戦のこの地域の最大歴史遺産として保存している。
民族的遺産と日本史的遺産が香流川流域に共有されている。
- ③本年9月までではあるが、「環境・地球博」が開催されている地元である事が地域住民に関心を持たせる大きなチャンスとなる。

「具体的活用案」

- ・「香流川クリーン作戦」年4回一名東区、守山区、長久手町共同
- ・「香流川自然学習会」7月 一流域500m以内の小中学校
- ・「香流川まつり」春桜祭り、秋おまんこ祭り、合戦祭り？
- ・「香流川健康ウォーキング大会」3月 歴史文化マップ作成
- ・「香流川ホテルの会」ホテル再生へ蘇生の再チャレンジ - - 等

自然、歴史、文化の大きなシーズを如何に活かすか、今年に与えられたチャンスである。しかし、問題はそのための旗振り役がまったく不在であることだ。庄内川流域の活動の中から手本となり活動は、2-3)に記した「土岐川観察館」であった。

その「土岐川観察館」立ち上げの原動力は、地域に密着した活動ネットワークと中心的人物の存在であった。そして、「香流川」に決定的に欠けているものは、この活動ネットワークと中心的人物である。

2) 里川づくりの牽引者は如何に

この地域の最大の問題点は、昭和50年以降のベットタウン開発に伴う新

住民が急増し、土着住人の比率が相対的に低下し、並行して自然と歴史文化が後退したことで、その後も転勤族が住民の18%を占める状況である。

この事は、住民の地域に対する愛着が弱く、歴史、文化への関心も希薄ならざるを得ない。しかし、転勤族の自分の体験からすれば、行く街の歴史文化のエッセンスはちょっと知りたいと言う希望も結構持つものである。

また、昭和50年以降の新住民といえども転居して、すでに30年を経過しほとんどがサラリーマンであり、定年を過ぎ新しい場を求めている人たちも多いはずである。いずれにしても、サラリーマンの性格としてなかなか自ら動く事が出来ず、何らかの導火線が必要となる。

①まずは、官主導による企画提案の呼びかけである。

例)「香流川・川街づくり人・ネット」のスタッフ募集

- ・既存の活動グループがあれば協力依頼
- ・既存も含め香流川事業への住民の興味を喚起する「

②この呼びかけは、香流川流域（最低：名東区・守山区・長久手町）の自治体の協働がキーポイントである。ー市、県の関わり？

③行政は、事前に過去10年の地域実態と活動家のリストを作り、彼らにも事前アプローチをする。

3) まとめ

しかし、これらの企画を誰が具体的に投げかけるか、その前段階の仕掛け人が必要となる。「里川研究テーマ」として、実験的な試みに挑戦するならば自分自身が、その牽引者とならざるを得ない。

この論に結論はないが、今回の研究の端緒が「里川」とか、地域活性とか、自然再生とかの様々な取り組みの難しさを知る事になった。その上で、それらの取り組みを行うにあたり、事前の徹底した調査が必要である事は言うまでもないが、自らが目指すべき川、自然、町、住人と対面して、その姿を見、語り、触る事の大切さを知る事が出来た。同時に、僕にとっては新しい発見と喜びの時空間でもありました。

そして、この体験をさらに発展させるために、自分流「里川」論を具体化する活動に今後も挑戦していきたいと考えています。

- 参考資料
- i)「猪高村誌」(昭和54年発行)
 - ii)「猪高石今昔」(昭和59年発行)
 - iii)「猪高村物語」(昭和63年発行)
 - iv)「香流川物語」(昭和52年発行)
 - v)「香流川」(平成15年発行)
 - vi)「野の花」(北隆館出版)

